明滅燈[[1]](#footnote-1)

映畵と寫實性

はあまり映畵を見ない。々年に二三回どころだ。日本映畵は無にかせようとするところが氣にはないし、西洋映畵は□[[2]](#footnote-2)なところがくて嫌だ。たまに靜かなユーモアを覘つたものもないではないが、どうも映畵はまだ魂にへる度には達しないらしい。しみであれ、可笑しみであれ、今日の映畵はあまりにごてごてにしてをり、作りすぎてゐるやうである。映畵こそリアリズムに還る必要があるのではないだらうか。〔小説家香山光郎〕

1. 『京城日報』1940年7月6日　明滅燈はコラムのタイトル [↑](#footnote-ref-1)
2. 獣的（じうてき）か。 [↑](#footnote-ref-2)